

平成 30 年度
青年中国上海スタディツアー
報告・感想集



公益財団法人茨城県国際交流協会

はじめに

平成31年3月4日から8日までの5日間、地域を担うグローバル人材の育成や海外青年との友好交流活動の推進を目的としたツアーを中国・上海市で実施しました。当事業は、(公財)茨城県国際交流協会が企画し、茨城県上海事務所のサポートを得て、県内の学生が在外公館や企業等の訪問、文化施設見学、現地大学生との交流などを行うもので、今年度は大学生22名が参加しました。

ツアーのふりかえりを兼ねて、参加者の新鮮な思いを綴った、報告・感想集をとりまとめました。現地訪問や交流会などで学んだことや体験したことについての報告と、全体を振り返っての感想を参加者ごとに記しています。現代の情報社会において、単に知識として知っていた中国と実際に自分の目で見て体感した中国とのギャップに、純粋な驚きをもって帰国した方も少なくありません。

参加した学生の皆さまが、未来を担う人材として広い世界に羽ばたいていく際に、今回の体験を糧として、グローバルな視野を持って活躍することを期待しています。

参加者の在籍大学である茨城大学、茨城キリスト教大学、筑波大学、常磐大学、共立女子大学、また上海でお世話になった皆さま、ありがとうございました。

公益財団法人茨城県国際交流協会



茨城県上海事務所からの眺望

旅 程

日程	内容
3月4日（月）	茨城空港から上海に向け出発 ・茨城県上海事務所職員との夕食懇談会 ・外灘地区にて夜景視察
3月5日（火）	・茨城県上海事務所訪問（研修、質疑応答） ・在上海日本国総領事館訪問（講義、質疑応答） ・JETRO 上海事務所訪問（講義、質疑応答） ・春秋航空本社訪問（講義、質疑応答、施設見学） ・日系企業関係者との夕食交流会
3月6日（水）	・上海豊田紡織廠記念館見学（講義、展示見学） ・上海養樂多貿易有限公司（上海ヤクルト販売株式会社）訪問（講義、質疑応答、工場見学） ・豫園での文化視察（ガイド付き）
3月7日（木）	・華東師範大学訪問（講義、現地学生とのキャンパスツアー） ・華東師範大学の中国人学生、日本人留学生との市内視察（グループ行動で南京東路・福州路散策、地下鉄乗車等） ・華東師範大学生との夕食交流会
3月8日（金）	空路、茨城空港に帰着

旅行業者：東武トップツアーズ株式会社水戸支店、 宿泊ホテル：上海華美国際酒店

参加学生 22名（50音順）

氏名	所属	報告
秋葉 翔太	茨城大学	総領事館
阿部 舞花	茨城大学	華東師範大
伊藤 晶	共立女子大学	学生交流
伊藤 雄大	常磐大学	企業交流会
内山 諒哉	筑波大学	県事務所
宇留野 健一	茨城刊サ教大学	豫園
大賀 哲也	茨城大学	春秋航空
大和田 隆志	茨城刊サ教大学	華東師範大
越久 紗也子	茨城大学	ヤクルト
糟谷 宗志	茨城刊サ教大学	豊田記念館
幸田 真帆	茨城大学	JETRO

氏名	所属	報告
古谷野 愛生	茨城大学	総領事館
酒井 夏鈴	常磐大学	豫園
須能 千紗	茨城大学	ヤクルト
高橋 郁香	茨城大学	豊田記念館
西田 佳織	筑波大学	県事務所
根本 崇生	茨城大学	外灘
比氣 梓	茨城大学	外灘
福島 清香	茨城大学	学生交流
松本 史琉	茨城大学	JETRO
谷田部 成美	常磐大学	企業交流会
横田 紗彩	常磐大学	春秋航空

報告・感想

秋葉 翔太

報告（在上海総領事館）

私たちは3月5日(火)の午前10時から在上海総領事館で約一時間程度、領事館の仕事内容や中国の方から見た日本の印象などについてお話いただいた。

田中領事からは、大使館と領事館の違いや領事館の仕事内容についてお話いただいた。私は、渡航前までは領事館と大使館の違いがわからず訪問する意義を感じていませんでした。しかし訪問してお話を伺ってみると、大使館は首都で日本政府と現地中央政府の連絡を行っているのに対し、領事館は地方に設置されており日本人向けの行政サービスや中国人へのビザの発行を行っていることを知り、日本人も多く居住している上海ならではの訪問先であったのだと感じた。また、領事館の活動内容として SNS や HP、イベントを通した日本の情報の発信を行っていることに驚いた。最近では方言のクイズや日本映画の上映会、著名な日本人による講演会などの活動を行っているそうである。領事館と聞くと、日本との連絡を主に行っているイメージだったので、発信もおこなっていることは意外であった。

徐さんからは、田中領事のインタビュー形式で中国から見た日本のイメージについて伺った。日本についての本には「地震が多い」という記載があったため、防災対策がしっかりしているというイメージを持っているそうである。また、初めて日本に訪れた際、「空気がきれい」や「日本人は優しい」という感想を持ったそうである。特に茨城県は食べ物が新鮮で美味しく、観光スポットが多いにもかかわらず PR が足りていないと感じたそうである。

徐さんのお話ででてきたようなことは、日本に住んでいるとある種の“当たり前”になってしまい、実感することが困難になっていると考える。日本を外から見て、新しい発見ができたのでとても貴重な機会になった。



感想

今回の研修では、中国の教育レベルの高さを実感した。4日目には華東師範大学に訪問し、現地の大学生や日本からの留学生と交流したが、キャンパス内では様々な国の留学生を目にすることができた。また図書館の学習スペースには、試験期間でないのにも関わらず学生

が詰めかけており学習を行っていた。このような光景は、日本ではあまり見られないなと感じたため教育レベルの差を実感した。



また、今回の研修では中国語を話す機会がたくさんあったため、学習のモチベーションアップにつながった。お店で注文したり店員に話しかけたりすることはできたが、相手の言っていることを理解することはできなかったため、まだ学習が足りないと感じた。これからも中国語の学習を意欲的に進め、中国で仕事や生活ができるレベルにしたいと強く思う。

阿部 舞花

報告（華東師範大学）

私たちは、このツアーの4日目にあたる3月7日（木）の午前中から昼食時にかけて、華東師範大学を訪問しました。そこでは、私たちは5～6名の4つのグループに分かれ、それぞれのグループに華東師範大学で学ぶ日本人の学生、そして日本語を学ぶ中国人の学生が1～2名ほど付く形で行動しました。

大学に到着するとまず1つの教室に集まり、国際教育センターで学歴生と研修生の募集管理を務める孫さんに、大学での生活や制度についてお話していただきました。留学に関するお話もあり、華東師範大学は多くの留学生を受け入れているようです。実際、私は多国籍な学生が授業を受けている光景に驚きました。その後、現地の学生も交え、キャンパスの散策を行いました。運動場や学生寮、そして図書室等の施設を回りましたが、キャンパスは広く、実際に通う学生にとっては徒歩での移動は難しいように思われました。しかし、道や景観は整備されており、キャンパスの雰囲気はとても綺麗でした。



昼食の時間には、私たちはグループごとにまとまり学食で食事をしました。そこで、始

めに驚いたのは、現金の支払いが可能な学食が限られていたことです。上海では、私の想像以上にキャッシュレス化が浸透しており、多くの学生は携帯で支払いを完了しているようです。また食堂には、日本料理、韓国料理、中華料理等たくさんのお店がありました。さらに、それぞれのお店でメニューも充実しており、私はなかなか食事を決めることができませんでした。昼食の時間は、グループで会話ができる機会の1つとなりました。私のグループで大きな話題となったのは、現在日本で注目を集め続けているタピオカです。上海では日常的なものとなっているようで、現地で人気のタピオカ屋さんが日本でも人気だったり、タピオカを通して日本と上海のつながりを感じました。

感想

私はこのスタディツアーに参加したことで、まだほんの小さいものですが、自分の中に上海のイメージを持つことができました。外灘でみた夜景は輝いていましたが、それは上海が、中国共産党のもとで急速な発達を遂げたという一面を象徴しているように思いました。しかし、そんな第一印象を抱いたからこそ印象的だったことは、バス移動の際に窓から見えた町の光景でした。上海に暮らす飾らないままの人々の生活が見えたからです。少し覗いてみると細い道がいくつも伸びており、その道では町の人々が笑っていたり、小さなお店がひしめいていたり、洗濯物が干されていたりと、生活感が溢れていました。

一見すると、上海はビルが建ち並ぶ街で、人々の暮らしなどあまり想像することができないかもしれません。しかし、今回実際に上海を訪れたことで、現地の人々を通して上海の概観をつかむことができました。また上海を訪れて、さらにイメージを大きくしたいと思います。ご同行してくださった皆様、ありがとうございました。



報告（現地大学生との市内視察と食事会）

スタディーツアー4日目の3月7日は、華東師範大学の学生と市内視察と食事会の交流を行った。これは日本人学生が5～6人のグループになり、そこに華東師範大学の学生が2～3人加わり行動するというものである。市内視察の場所は主に南京東路。周辺には1日目の夜に見学した夜景で有名な外灘、また3日目に視察した豫園があり、観光地が密集している。

上海に到着してから3日間、雨や大気汚染の影響により上空が曇って見え、青空と太陽を見ることは1度もなかったが、この日は、上海で初めて見る青空で市内視察するには非常にいい天気恵まれた。



私たちのグループは外灘の方へ向かって歩いた。たくさんのお店が並ぶ南京東路には、UNIQLOやFILA、韓国のコスメブランド、上海新世界大丸百貨店に、お土産屋さん、高級ホテルなどが建ち並んでいる。多くの観光客と地元の方達で賑わっているため、歩道を歩くだけでも一苦労。南京東路の最東に建つのが高級ホテルである「和平飯店」である。このホテルの歴史は1832年から始まり、建物が落成したのは1929年という100年以上の歴史が詰まったホテルだ。和平飯店の目の前は、夜景で有名な「外灘」。ここで私が驚いたことは、夜訪れた時よりも人が非常に多いということだ。夜に訪れる外灘も魅力的だが、昼に訪れる魅力は南京東路にたくさんのお店があるところではないかと私は感じた。

上海新世界大丸百貨店にてお茶するグループと百貨店内を見るグループになり、私は百貨店内を歩いた。エスカレーターが螺旋になっていたり、お店に入れば店員さんがすぐに近寄ってくるのは日本とは大違いである。地下にある食料品売り場を見てみると中国のモノではなく、圧倒的に輸入品の販売で中国感がなかった。

食事会では「火鍋」を皆で囲みながら頂いた。火鍋は日本のしゃぶしゃぶと似ており、野菜や麺などを入れて食べる。似ていない点は、お肉が非常に薄いため、お肉を鍋の中に放置してしまうと溶けてしまう。また、タレはお店の中心にあるセルフコーナーで自分の好きな味に作ることができる。今回、テーブルの上には白米も並んだが、通常、火鍋を食べる時は白米は並ばないと言う。炭水化物を取らずに、野菜やお肉でお腹いっぱいにするそう。

市内視察と食事をしながら華東師範大学の学生と交流というのは、畏まらずに楽に話すことが出来たので、とてもいい機会であった。

感想

終わってしまうとあっという間の4泊5日は、私にとってかけがえのないものになった。このスタディーツアーに参加しようと思った理由は、これからの将来について何かきっかけになればいいと思ったからだ。普段関わることの出来ない茨城の学生や華東師範大学の学生と関わり、先輩後輩関係なく、卒論のことや将来について話し、自分の不甲斐なさを痛感した。就職を目前に控えた4年生、卒論のテーマに対して中国ではどのような捉え方をしているのか聞く3年生、留学を控え積極的に英語でコミュニケーションを取る同い年である2年生、将来どのような職業で働くか決めている1年生。将来について何も定まっていない私にとって、ここで出会ったメンバーとの会話は、私を奮い立たせてくれた。

これから今まで以上にインターンシップや就職活動に参加し、さらに積極的に資格等を取得し、大学生生活残り2年間に有意義な時間に過ごすことができたらいいと思う。



伊藤 雄大

報告（企業との夕食会）

私は、中国上海スタディーツアー2日目の3月5日（火曜日）に上海市内レストラン「老八様」にて現地や中国に訪れる日本人のビザの取得支援をしている方や、常陽銀行の方などの日系企業関係者との夕食交流会に参加しました。（広東料理）

まず私は大学4年生であり今年の4月から新社会人になるので社会人としての先輩である日系企業関係者の方々と夕食交流会に興味がありました。

私はビザの取得支援をしている中村様の席に同席させていただきました。中村様との席では仕事の話はもちろん、人生の先輩として仕事以外の様々なお話を聞かせていただきました。また現地のお酒である紹興酒もごちそうになりとても有意義で楽しい時間を過ごすことができました。

この日系企業関係者との夕食交流会を通して私は海外に行くのは3回目ですが簡単に海外に行けるのではなく海外に行くにはいろんな人が動いている大変さを知りました。です

が海外の人と関わりをもてることの素晴らしさも感じることができました。



中村様から「まだ若いから積極的に海外に足を運んで現地の人の仕事を直接自分の目で見たり、どのように関わりをもっているかを体感したほうがいい、百聞は一見にしかずだよ」というお言葉をいただき日本だけじゃなくて世界レベルで仕事をみたり、体感したほうがよりスキルアップすると感じ自分の就職先にも取り入れてみようと思いました。

感想

今回上海スタディツアーに参加して4泊5日との短い期間でしたが楽しい時間を過ごすことができました。

私は上海に行くのは初めてでした。上海の観光地は人が多く建物も大きく上海テレビ塔のイルミネーションがとてもきれいでした。

上海はバイクがガソリンではなく電気で走ったり、現金ではなく携帯の電子決済が主流でお店によっては電子決済しかできないところもあり驚きました。日本とは違うところが多く上海と日本の文化の違いを知ることができました。日本だけではなく他の国々にも目を向けていき日本との違いを知るようにしていきたいです。

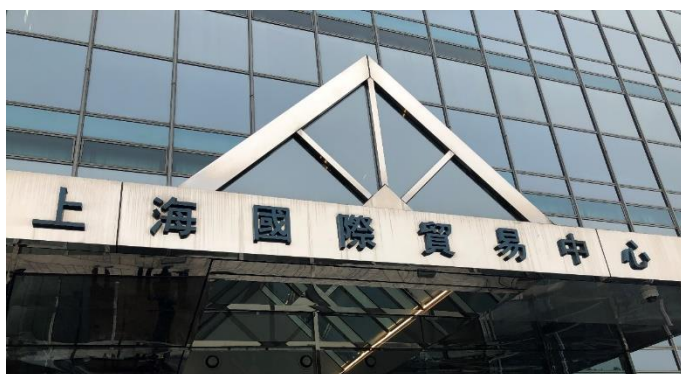


報告（茨城県上海事務所）

研修2日目に当たる3月5日に上海にある茨城県上海事務所を訪問しました。ここでは、事務所長の野上周さんに茨城県上海事務所の歴史や取り組みなどについて説明していただきました。その中でも自分自身驚いたことは、茨城県と中国との関わりが予想以上に深かったことです。私自身、茨城県外出身でここまで親密な関係だとは思っていませんでした。そのルーツは、朱舜水と徳川光圀が生きた江戸時代にまで遡るそうです。

事務所自体は、1996年に発足し、茨城県と中国を結ぶ架け橋として、様々な政策に取り組んできました。例えば、輸出促進計画があります。茨城県は県内企業製品の輸出、中国側は上海を輸入貿易拠点と捉えており、かつ日本製品に対する絶大な信頼があるため、両者の思惑が一致する希少な分野であります。企業の製品をジャパンプランドに出展し、トライアル販売を実施したり、博覧会でPRしたりするなど精力的に活動しています。その輸出においても現時点で課題は多くあります。中国本土における茨城県産農林水産物の輸入禁止が出されたり、中国景気が減速したり、円高が進行したりするなどの問題が存在しています。この打開策として、茨城県の伝統工芸品の輸出促進や中国の友好交流都市間を通じた地方政府への売り込みなどを検討しています。また、貿易面以外でも課題は存在します。米中関係に付随する日本への影響やそもそもの日中関係の悪化、訪日中国

人のビザ取得が容易ではない点などが挙げられます。そのため、上海事務所で開催として考えているのは、MICEの推進やポートセールスの支援、北関東3県と横浜市で協力し、観光PRを実施することだそうです。今後、茨城県と中国の関係がより親密になっていけばよいと私は考えています。



感想

今回、上海ツアーに参加して自分自身いろいろなことを考えました。1つは、海外で働いていらっしゃる方々からお話を伺うことで、大学時代に何をすべきか、しておいたほうが良いことを知ることが出来ました。自分の将来から逆算して、今後行動していきたいとします。また、上海の街並みを見て、正直日本とは違い、勢いや活気を感じることができました。歴史的な背景を踏まえても、日本は中国から学ぶべきことが今現在でも多くあ

るのではないかと思います。日本はどちらかというと欧米の模倣だと私自身思っていますが、中国からは欧米的な雰囲気はあまり感じず、自文化を重宝している印象を受けました。今後は日本らしさをより前面に出し、日本が発展していけば良いと思います。将来そこに自分も関与できるような仕事が出来るように頑張ります。



宇留野 健一

報告（豫園）

上海スタディツアー3日目（3／7）に私たちは旧上海城の北東部に位置する観光地の「豫園」を見学しました。そもそも豫園とは、四川省の役人であった潘允端が刑部尚書だった父親のためにと1559年から1577年まで18年の歳月を費やし造営したと伝えられているとのこと。また「豫」という文字には安泰・平安を示し、その名前はすなわち「楽しい園」という意味を持つようです。

豫園内を実際に見学すると、まず初めに中国の伝統的な建築・彫刻の数々が園内に多く見られることに気づきました。これらの景色は近代都市へと発展し華やかな街である上海とはまるで違い、伝統的な中国を感じさせられる景色でした。また、見学中に「龍壁」をはじめとする様々な動物の像や池のほとりに立つ「玉玲瓏」と呼ばれる名石等の説明をしていただきました。豫園内を見て回り、日本の京都のような空間とは違い中国独特の文化を感じることができました。次に豫園内の西側には「豫園商城」と呼ばれる多くの土産物屋やレストラン、ショッピングモールが連なっており、食事や買い物を楽しむ人達が多く見られとても賑やかな雰囲気でした。また、豫園商城は伝統建築の建物が立ち並んでおり



その景色にもまた圧倒されましたが、夜のライトアップされた豫園商城はまるで城下町のように賑わう空間を感じました。

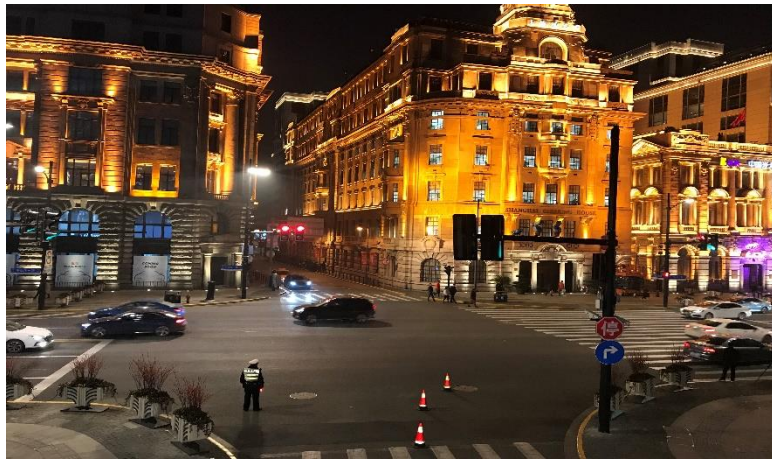
豫園を見学したことで上海の煌びやかなイメージだけでなく、伝統的な中国も感じられ中国に対する見方も変わりとても勉強になりました。

感想

私は今回の上海スタディツアーが初めての海外であり、色々不安な部分も多々ありましたが5日間を通してとても充実した時間を過ごすことができました。それは上海というとても発展した都市を見て回り、肌で実感することで中国に対する見方が自分の中で変化したからです。実際に現地を訪れることの重要性を改めて感じました。また今回のツアーでは上海で働いている日系企業の関係者の方々との食事会がありましたが、様々なお話を聞くことができとても勉強になりました。さらに現地の中国人大学生や日本人留学生との交流会は普段の生活の中ではなかなか経験のできる機会ではないので、とても貴重な体験でした。色々な方と出会

えたことに心から嬉しく思います。

今後の抱負としては上海スタディツアーを通して学んだこと、感じたことを多くの人に伝え日中の友好に少しでも繋がればいいなと思います。



大賀 哲也

報告(春秋航空本社)

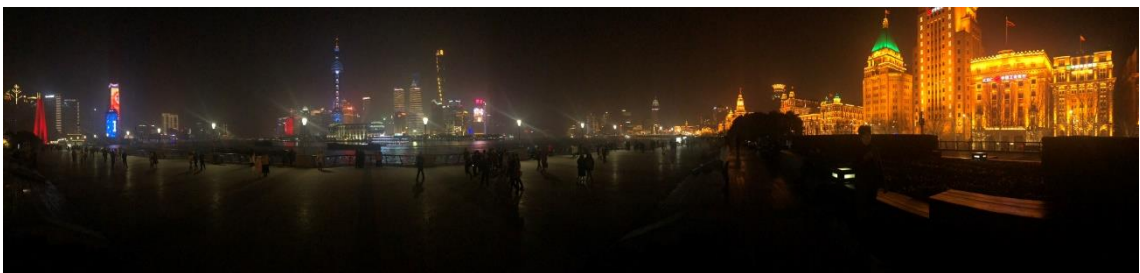
スタディーツアー3日目、春秋航空にて会社説明のプレゼン受講と施設見学を行った。春秋旅行社という小さな旅行代理店から成長を遂げた春秋航空の経営戦略の根底にある信念を知る事ができた。国内ないし海外旅行の大衆化へ貢献したいという想いがLCC (Low-Cost-Carrier) という形に繋がり、人々の需要を捉えたと感じた。春秋航空はLCCでの航空券の低価格提供だけにとどまらず、企業内で儉約文化を築き上げ、それにより節制されたコストまでもお客様に還元している。講義資料のなかに出てきた質素な社長室はかなり印象的だった。また日本における独特な就航先(茨城、高松、佐賀)は観光業との相乗効果を図ったものとも感じた。何より彼ら自身が日本の地方と上海を結びつけている事を自負している姿に感心した。訪日中国人が順調に拡大する反面、訪中日本人数は2011年からの5年間で3割減少しており、我々日本人も努力す



る必要がある。原因は尖閣諸島問題以降の日本における中国理解に対するギャップであろう。今回のスタディツアーのように中国への理解を深める活動が観光客数を対等にする一歩になると思う。春秋航空は企業内での努力も優れており独自のシステム開発により搭乗率9割以上達成という実績を持つほか、少数でも効率的に稼働するオペレーションルーム、最も印象的だったのはフライトシュミレーションセンターなるものだ。急速なLCC市場の発達によるパイロット不足に対応するいわゆるOJT（On-the-job-training）のような取り組みだ。急速な成長を遂げた中国であるが、高度経済成長期の日本企業とは違い、人材育成にも配慮している感じが感じられた。これからも就航先を拡大していく予定の春秋航空だが、中国国内での税金や法律の制限などの障壁が存在しているようだ。いずれにせよこれからの春秋航空の活躍に期待すると同時に彼らの活躍に少しでも寄与できるような活動をしていきたい。

感想

私はアジア経済に興味があり、就職活動や卒業研究で忙しくなる前に実際にアジアの国に訪れて実状を見たいと思い今回の上海スタディツアーに参加しました。私のゼミの教授は経済を理解するにはそれぞれの国の政治、文化、慣習などの理解を深める事も必要とおっしゃっており、今回のスタディツアーはそういった異文化理解の点でも沢山学ぶことができました。環境問題や交通整備等の問題点も感じたが、ITを駆使したキャッシュレス化の普及は日本より先進的であり、また現地学生との交流も非常に刺激的でした。政治体制の違いによる政策施行のスピード感の違いなどのお話も聞け様々な事への興味を抱く日々でした。今回のツアーをきっかけに中国の他の地域やまた中国以外の国についても学び、その経験を卒業研究等で自分の為にかけていきたいです。



報告（華東師範大学の紹介と市内散策）

私たちは上海にきて4日目に華東師範大学に行き、大学の創立や部活動、サークル活動などの紹介をしていただきました。その中でも、ドラゴンの船に乗り順位を競う競技は日本ではあまり聞きなれない競技で、川幅が広い中国ならではの競技だと感じました。また、華東師範大学は、大夏大学と光華大学を統合された大学である。校内は中国伝統の園庭の造りとなっていて、川が流れており、建物はヨーロッパ風の建物が立ち並んでいる。教育面では、他の大学と比べて力を入れているのは教育系だと講義してくださり、さらに「恋をしたいなら華東師範大学に来なさい」など他の大学と比べても入学や留学がしたく

なるようなお話もしてくださり、講義中の雰囲気はとても明るく、次の行動において私たちと華東師範大学の学生が交流しやすい環境が整えられていました。その後、大学内を歩き図書館に向かいました。図書館はとても広く一階にはカフェがあり、様々な言語の本があることが案内図をみて分かり、図書館は多くの学生が利用していることが分かりました。昼食は学園の食堂で取りました。食堂は一階と二階にあり、一階の食堂は電子マネーでの支払いだったので私たちは二階の食堂で昼

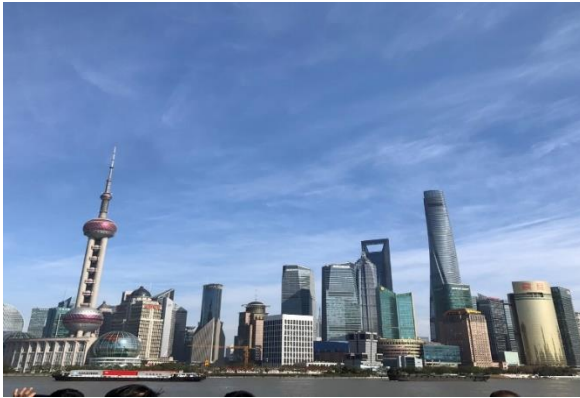


食を取りました。中国のほとんどが電子マネーでの支払いになっていて、日本も中国のように電子マネーが主体になる日がきっと来ると感じました。料理は学生に優しい値段で、二人前ほどの量で多くのツアー参加者が満腹になっていました。

昼食を終えた私たちはバスに乗って外灘近くのショッピングモールや市場を散策しました。街の風景はヨーロッパ風の建物が立ち並んでおり、市内散策をしながら現在上海に住んでいて華東師範大学に通っている学生と日本にいた時と上海に住んでいて異なる点、文化の違いを感じた時などを話し合い、理解を深めました。

感想

今回上海スタディーツアーに参加して様々な人と交流することができ、日本では魅力度最下位の茨城でも日立グループのある場所に住んでいる、鹿島アントラーズがあるよ、な



ど世界にでても茨城の名前が通用して、元々好きだった茨城に誇りを持つことが出来ました。総領事館の時にお話ししてくださった「故郷を離れて、故郷に帰った時に故郷がもっと好きになる」というお言葉が分かった気がしました。また、ツアーに参加した人々や華東師範大学の人たちのコミュニケーションに対する積極性を今後の自分に取り込もうと思いました。

越久 紗也子

報告（上海ヤクルト）

私たちは、5日間の上海スタディツアーの3日目に上海ヤクルト販売株式会社へ訪問した。まず、建物に入ったところに人より大きなヤクルトの置物が2つ置いてあり、撮影スポットになっていた。さらに、中国語だったため詳しくはわからなかったが、食品安全や食品のついた言葉が載った表彰記念品が沢山飾ってあったため、それだけ食品に対する意識が行き届いていることがわかった。この訪問ツアーでは、まずヤクルト会社の紹介ムービーを見て、そのあと実際にヤクルトを作っている工場見学をした。紹介ムービーでは、ヤクルト会社の歴史やこだわりを学んだ。私が新しく得た知識としては、ヤクルトの創業者である京都大学医学部の白田みのるさんがシロタ株を発見し、それがヤクルト創設につながった。1本のヤクルトにおよそ1000億個以上のシロタ株が入っており、全てではないが、その菌はヤクルトのキャッチコピーでもある「生きたまま腸に届く」そうだ。また、ヤクルトは食品のイメージが強かったが、医薬品や化粧品も販売している。特に、私が興味を持ったのは化粧品で、主に肌に直接触れる基礎化粧品が多い。それは体の内側に良いものは体の外側にも良いからだそうだ。



ヤクルト会社の人が豆知識として、ヤクルトを飲んだ後に少量残ったものを手の甲などに塗って洗い流すとサラサラになると教えてくれた。工場見学では、実際にヤクルトを製造している工程を見ることができた。話によると、上海で製造しているとはいえ、製造方法や容器の原料、機械など日本と同じらしい。それは、上海だけでなく、全国共通なので、

工場の社員がどこへ転勤しても働くことができるそう。最後に、私が1番興味深かったのは、ヤクルトの容器がわざと飲みにくい形状になっているのは、1回で飲みきるのではなく、数回に分けて飲むことでより満足感を与えられるからだそう。今回の訪問ツアーによって、ヤクルトに対する考え方が大きく変わり、周りの人にもヤクルトの良さを広めていきたいと思う。

感想

私は、小学生の時に家族旅行で、ベトナムへ行ったことがあるが、幼かったこともありあまり記憶に残っていない。海外に行ったのはその一度だったため、今回の上海スタディツアーは、私にとって初めてに近い海外の旅だった。上海の夜景、現地の企業見学など新しいことだらけで楽しかったが、1番記憶に残っているのは当たり前のことだが、どこへ行っても日本語はほとんどなく中国語で表記されている文字だらけだったことだ。もともと、大学では中国語を習っていたため、現地でもなんとかなるだろうと思っていたが、その考え方では甘かった。やはり、知らない単語だらけで、例えば「～酒店」を私ははじめお酒のお店だと思い、上海にはお酒のお店が沢山あると勘違いしていたのだが、実際はホテルだったということがあった。他にも、買い物をする時に、店員さんが値段の違うお茶の説明をしている時に、何も分からず日本人留学生に通訳をしてもらったという体験をした。このように、言語は実際に現地に行ってみないと分からないことが多く、これから中国語を勉強する時は、ただ暗記するのではなく、その国へ行った時に使えるように勉強しようという意識が変わった。今回の上海スタディツアーのおかげで、次回、中国へ行く際には中国語でコミュニケーションできるようになりたいという目標ができた。



糟谷 宗志

報告（上海豊田紡織廠記念館）

私たちは、3月6日に上海豊田紡織廠記念館を訪問し、この記念館が成立したきっかけとそれに伴う紡織産業の歴史の一部を知ることができた。その際、この上海豊田紡織廠記念館は記念館であるが存在は表にあえて出しておらず、ゆえに完全予約の体制をとっているとの説明を受けた。完全予約制の理由としては、戦争時の日中関係と結び付けた偏見

や、マスコミの語弊に伴う間違った情報の拡散を防ぐためなどが挙げられる。つまり、本当の意味で理解を深めたい者だけにこの記念館を訪れてほしいという理念のもとに行っているとのことであった。

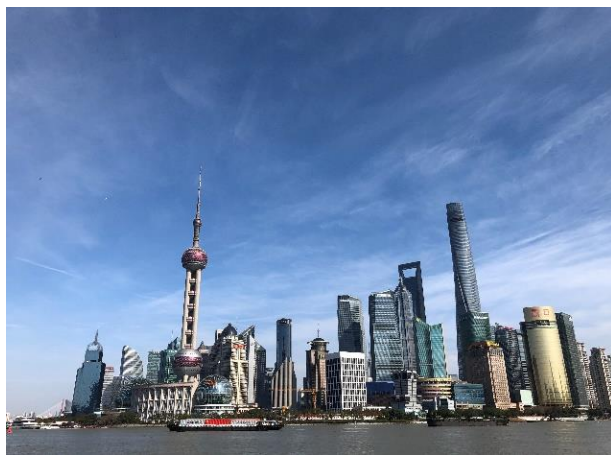
初めに私たちは、食堂棟（多目的ホール）で上海豊田紡織廠が設立した経緯と豊田佐吉という現在の「トヨタ」の根本となる人物の功績を学んだ。1921年に上海に設立されたトヨタグループ初の海外拠点である上海豊田紡織廠は、1945年まで稼働し続け、トヨタの発展の架け橋となった。中国との友好的な関係を築き、そしていまなお続く日中の繋がり背景には、豊田佐吉の偉業ともいえる活躍があったのだと理解することができた。

次に事務所棟（展示室）では、豊田佐吉が弱冠23歳で発明した「豊田式木製人力織機」と57歳の時に発明した「G型自動織機」を拝見することができた。「発明は製作を完全にし、十分な営業的試験をしなければ世に出してはいけない」という物作りに対する哲学のもと発明されたこれらの織機は、当時の紡績産業において革命的な存在であったということを豊田佐吉の発明に対する強い信念を通して学ぶことができた。



今回の豊田紡織廠記念館の訪問では、私たちが今までに知ることができなかった「トヨタ」の歴史を垣間見ることができた。トヨタグループの創始者である豊田佐吉の「障子を開けてみよ、外は広いぞ」という言葉には、彼の様々な思いが詰まっているのだと私は感じた。

感想



今回の上海スタディツアーで私は、経済的側面からみた上海の現状や今後の日中関係における発展的な進捗状況を学ぶことができた。また、実際に足を踏み入れることでその土地の文化や慣習を目の当たりにし、グローバルな視点で物事を捉える力を養うことができた。

中国、なかんずく上海は、これからもっと発展していく都市だといっても

過言ではないので、今回のスタディツアーでより上海に興味を持つことができた。「いい経験だった」で終わりにするのではなく、今回の旅で得たものは今後どこかで必ず役に立つと思う。5日間という短い間だったが、私にとってこの5日間はとても貴重で有意義な時間であった。

幸田 真帆

報告（JETRO）

上海スタディツアー2日目、日本貿易振興機構（JETRO）上海事務所（以下、ジェトロ上海）を訪問した。ジェトロ上海は、中国に進出する日系企業の支援や、中国企業が日本へ進出する際にする「対日投資」の促進を通し、日中の貿易や経済促進のため活動している。訪問時には、ジェトロ上海の職員の方から、「中国の最新経済動向」と「中国における対日直接投資誘致」について講義いただいた。



中国の最新経済動向について、印象深かったのは、発展スピードの速さ、中国内の消費者の嗜好や消費活動の動向の変化についてである。中国は、政治において大きな権力を持っている共産党の意向により、政策や事業を計画・実行するスピードが速いという。とくにデジタルの分野においては、海外生まれのアプリや検索エンジンの利用・閲覧を統制する一方で、ウィチャットペイ、アリペイといったモバイル決済は急速に進展した。さらに近年、デリバリーサービスのついたインターネットショッピングの普及に伴い、消費の利便性が向上、雇用形態にも変化がみられるという。消費者の嗜好については、ライフスタイルの高度化・成熟化により、モノ消費からコト消費への変化や、少し高くても安心安全で質の高い商品を消費するといった変化がみられるという。

中国における対日直接投資について、中国の対日直接投資額は、2004年からの対外投資の規制緩和が要因で増加傾向にある。実際に2017年の対日直接投資額は28.6兆円となっており、4年連続で過去最高を更新したという。一方で、中国-日本間の直接投資額をみると、日本から中国への投資額に比べ、中国から日本への投資額は3分の1以下であり、日中二か国間の投資額の不均衡が発生している。

今回ジェトロ上海を訪問して、中国の経済状況について、初めて知る現状が多々あった。日本と中国の経済について、とくに中国の変化について自主的に学び理解しようとする姿勢の必要性を感じた。

感想

とにかくもう一度上海に行きたい！という思いから参加を即決した、上海スタディツアー。帰国し、滞在中のメモ帳や携帯の写真のフォルダを見返す今、今回このツアーに参加して得た学びや気づきの大きさを実感している。個人的にとくに良かったと思うことは、上海や中国をより身近に感じ、興味を持てたこと、また日本と中国のかかわりの深さに気



づけたことである。今までいかに自分が無知だったか、中国について偏った見方をしていたかを思い知った。隣国として歴史上も現在も、人と人との交流をはじめ、文化、経済などあらゆる面で、日本と中国は互いの存在が重要なのではないかと思う。今後は、自ら様々な情報を得、問題を忌避するのでも、良い点を過大評価するのでもなく、中国と日本のことについて楽しみながら考えていきたい。

古谷野 愛生

報告（在上海日本国総領事館）

3月5日、私達青年中国上海スタディーツアーのメンバーは上海市万山路にある在上海日本国総領事館へ向かった。

総領事館は高い塀と有刺鉄線で囲まれており、入口には警備員がいた。建物に入る際もパスポートを提出するなど、警備はかなり厳重なものであった。正直、メンバーのほとんどはその独特の雰囲気緊張していたのではないかと思います。

総領事館で行った主な活動は職員の方のお話を聞き、意見交換を行うというものだった。上海の社会事情から世界、そして日本との関係・在上海日本国総領事館について資料を用いながら説明して頂き、適宜質疑応答を交えつつ意見交換をした。現地の職員の方はとても気さくで自ら説明をしている最中に学生へちょっとした質問を投げかけてくださったりジョークを交えつつお話をしてくださり、私達も徐々にリラックスすることが出来た。説明が一通り終わると、中国人の職員の方へ日本人の職員の方がインタビューをする形



で日本に関係の深い仕事を選んだ理由などを聞かせて頂いた。

これらの活動を通して、私達は改めて日本に住んでいる時には知り得ない日本と中国の関係性を学び、歴史や政治など表面化した社会的側面でしか中国を見ていなかった思考が明らかに変化したことを感じた。特に経済事情の点でいえば多くの日本人は中国よりも日本の方が優れていると思っているはずだ。しかし実際のところ、GDP など目に見えない経済発展の数値は中国は日本にはるかに優っており、都市の近代化や市民の生活の向上など目に見える発展においてもその勢いはとどまることを知らない。

今後もこの上海という街は世界でも有数の発展都市として名を轟かせることだろう。そして私達が世界の動きをみる際、在上海日本国総領事館で行った活動は間違いなく役に立つはずだ。今回得た見聞を自らの知識や思考により磨きをかける為の材料として大切にしていきたい。

感想

今回参加した青年中国上海スタディーツアーで過ごした5日間は私の将来の選択を有意義なものにする素敵な時間だった。特に印象に残ったのは2日目の夜の現地の日本人の方との夕食だ。そこでは豪華な中華料理とともに現地で仕事をしている日本人の方から上海で生活する生の声、そして日本人ならではの観点からみた上海についてのお話を伺った。



私の将来の夢は多文化な教室で一人一人を大切にできる教室経営をすることなので、その夢の実現の為に自分がこのツアーで達成したい【本当の中国人を知る】という目標をかなり達成出来たと思う。多くの日本人は中国に対し、偏見と色眼鏡を持っている。そしてこれらを取り除くことはとても難しい。グローバル化する社会において重要なのは英語を話せるようになることでも、日本文化を世界に伝えることでもない、「世界中の人々への差別や偏見をなくすこと。」だと私は考える。だからこそ、私は私を発信源にこの青年中国上海スタディーツアーで知った本当の中国人をありのままに、多くの人に伝えたい。

報告（豫園）

私は、3月6日のお昼頃に中国の豫園という所に行きました。

もとは四川布政使の役人であった潘允端が、刑部尚書だった父の潘恩のために贈った庭園で、18年の歳月を費やし造営されました。当時の敷地面積は、今の2倍もの広さがありましたが、1956年に庭園を整備し現在の庭園となりました。この場所では16世紀から18世紀



の時代の文化をそれぞれ感じることが出来ます。豫園内の綺麗な庭園を見ながらショッピングやグルメを楽しむことのできる、人気の観光スポットの一つとなっています。豫園に行って私が豫園を散策して感じたことは、上海は都会なのにこんなにも歴史を感じられる所もあるのだなということです。私自身中国の歴史は教科書で勉強したり、事前研修で少し学んだくらいで昔の中国の文化や歴史について知らないことだらけでした。このツアーをきっかけに文化や歴史について触れに行くことにしました。実際に参加をして、豫園は日本の京都のような落ち着いた文化と違い、華やかな文化であるということを知ることが出来ました。

豫園内で足元の所に敷石がモザイクみたいな装飾になっていたり、ブロックごとに変った形のした門があったりなど様々な工夫が凝らしてありました。

豫園での自由時間の時日本でも有名な本場の小籠包のお店で本場の小籠包の味を堪能しました。

4日間の夜ご飯では様々な中国料理を体感しました。日本ではなかなか感じられない独特な香辛料などが利用されていて、味の違いを確かめることが出来ました。海野さんによると上海の料理は甘めに作ってあると言っていました。また、料理が全て出終わるとスイカが出てくるということにびっくりしました。

改めて日本と中国の文化の違いを知ることが出来ました。

感想

今回の上海スタディツアーに参加をして、現地の生活や風景などを通して中国の文化について学ぶことが出来ました。例えば、中国はなんでも先に行動に移して、改善点を見つけて良いところだけ残して行うという政治方法で行っていたり、無音のバイクがあり、無音のバイクが自転車みたいな扱いであるということなど様々なことを知ることが出来ました。



このような体験を通して他の国の文化にも触れてみたいという思いが強くなりました。また今回中国語の知識がないまま参加した為、中国語の知識を身につけて、再度中国に訪問してみたいと思いました。

短い間でしたがこの上海スタディツアーに参加出来て良かったです。ありがとうございました。

須能 千紗

報告（上海ヤクルト）

私たちは3日目にヤクルトの工場を見学に行った。ヤクルトの工場はすべて日本から輸入された機械を使っている、どの国で工場をみても同じ機械が使われている。上海のヤクルト工場は2006年に誕生し、特徴としては一方通行で作業が行われていて、その長さが100メートルもあることが挙げられる。まず、最初に見たのは、シード室というところだ。ここで、乳酸菌を成長させる作業が行われる。150リットルもあるシードタンクが全部で7個、シード室には置かれている。この過程はヤクルトを作る上で最も重要な過程であり、従業員は、一度失敗するともう二度と、この工程では作業することが認められないほど重要な工程である。次に見たのは、培養室だ。ヤクルトは発酵食品なので1日では出来ない。シード室で培養した乳酸菌をタンクに植えつけて、約1週間ほど時間をかけて培養させる。ここには、24000リットルのタンクが20個ある。1つのタンクで約60万本のヤクルトを作ることができる。このタンクの清掃は、自動清掃の後、人が中に入って手洗いで洗う。次は、調合室だ。ここでは、味の調整が行われている。ここで甘いシロップを調合して甘酸っぱいヤクルトにしている。次は品質管理室だ。ここでは、いつでもどこでも同じ味になるようにする役割がある。ここでの工程が高品質なヤクルトにつながっている。次は成形室だ。成形室では、1台1億円の機械が12台ある。1時間に7000本のヤクルトの容器を作っている。



その後無菌化しながら充填室に運ばれる。次の充填室では、人の目で異常がないか確認しながら容器に液体を詰めていく。最後の包装室では、ヤクルトを5本ずつに包装する作業が行われてる。熱風でセロファンをヤクルトの形にあわせ、冷やすことによってセロファンの形が決まり、ヤクルトが完成する。

感想



私は今回上海スタディーツアーに参加して、一番印象に残ったのは、外灘の夜景である。一番楽しみにしていたのでとても感動した。外灘の夜景は上海で一番有名な夜景スポットであり、西洋式の建物がライトアップされていてとても綺麗だった。西洋式の建物の中には銀行もあった。また、黄浦江の対岸にはテレビ塔「東方明珠塔」を中心とする高層ビルがたくさん立ち並んでいてとても感動した。今回のスタディーツアーでは企業の方々とお話する機会がたくさんあってとても勉強になったが、観光もできて上海のよさが少しわかった。また上海に来て観光をしたりディズニーに行ったりしたいと思った。

高橋 郁香

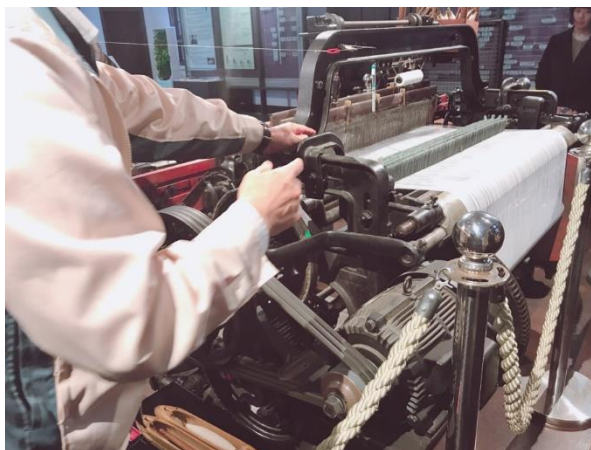
報告（上海豊田紡織廠記念館）

3月6日（スタディーツアー3日目）に上海豊田紡織廠記念館を訪問しました。こちらは、世界的自動車メーカーであるトヨタ自動車の前身で、トヨタグループの始まりとなりました。こちらでは2時間ほどお話を伺いました。観光スポットとしてインターネットや本など、表向きには公開していないと聞き、本当に貴重なお話を伺うことができました。このスタディーツアーが無ければ恐らく上海豊田紡織廠記念館を知ることもなかったと思います。

お話の中で、中国における日本の租界地において、日本人は中国人を低賃金でかつ長時間、その上暴力を振るって働かせていたと初めて聞きました。（そのような状況下であって、豊田紡織廠は中国人を上職に就かせるなど、良い労働環境を整えていたそうです。）歴史の授業では自国の悪い面はなかなか教えられることはないのですが、ここで話を聞いて戦時中の日中間のリアルな関係性を知ることができました。またトヨタグループの創始者である豊田佐吉が自動織機を作ったこと、そして発明王と呼ばれていたことを知りま

した。記念館では、「無停止杼換式豊田自動織機」、「豊田式木製人力織機」、「豊田式糸繰返機」を見ることができました。実際に動いているところを見て、こんなに複雑で精巧なものを考えて作り上げたことに感動しました。

お話の最後に、明治維新以降日本が急速に成長し欧米に肩を並べることが出来たのは教育の水準が高かったからだと言いました。今、「日本は素晴らしい」「日本の技術は進んでる」などメディアは日本を礼賛しているように感じますが、今後日本は中国に抜かされていくと思いました。中国では日本以上に受験戦争が厳しく、幼い頃から塾に通ったりしていると聞きました。対照的に日本ではそこまで教育に力を入れてないように感じます。国民の教育の水準が上がることは、国家の発展に繋がると思います。日本は現状に胡座をかいている場合ではないなと思いました。



感想

今回の上海スタディーツアーで初めて海外に行きました。飛行機に乗るのも初めての経験で、全ての事が新鮮で楽しかったです。このスタディーツアーを通して、海外により関心を持ったというよりは改めて日本の良さを痛感しました。特に食事の面で、味噌汁や白米など日本の食事が恋しかったです。

ただ海外に行ってみたいという勢いだけでひとりで参加したこのツアーでしたが、他の学校や学部、学年の人と知り合うきっかけが出来てとてもいい機会でした。スタディーツアーというだけあって、領事館などなかなか見ることの出来ない施設の見学が出来たことも良い収穫でした。



また、大学の第二外国語で中国語を取っていて、半年間だけの授業でしたが今回中国へ行った際に、授業で習ったことを使えて言葉が通じる喜びを感じました。この経験を通してより中国語を勉強したいと思いました。これから中国語の授業自体は無くなってしまいますが、独学で勉強していこうと思います。

報告（茨城県上海事務所）

到着日（3／4）の夜は早速、茨城県上海事務所の職員の方々（野上さん、海野さん）との夕食会がありました。上海市内のレストラン「新協通」にて、本場の上海料理を味わいながら、打ち解けた雰囲気テーブルごとに会話を楽しみました。

ツアー二日目当たる翌日（3／5）は、茨城県上海事務所を訪問し、事務所の取り組みについて一時間弱の講義を受講しました。

特に印象に残ったのは、茨城県は意外に中国と密接な関係にあるというお話です。周恩来元首相は日本留学時代に筑波山に登頂したことがあり、儒学者朱舜水是徳川光圀の学問の師であったというエピソードの紹介がありました。また、中国国家の作詞者である田漢氏が筑波大学（東京高等師範学校）の卒業生であるということは、筑波大学が中国で有名であることの大きな理由として挙げられるということでした。茨城県上海事務所は、地理的・歴史的に関係が深く、今後の経済発展が見込まれる中国との交流を促進する目的で1996年に設立されたということですが、茨城県と中国が「地理的・歴史的に関係が深い」ということが、このお話を通してより鮮明になった気がしました。

これまで、「中国進出企業の支援」、「日中自治体間交流の支援」、「上海茨城県人会の運営」、「茨城空港就航対策業務」、「インバウンド促進」、「県内中小企業の輸出支援」をはじめ、日中の架け橋として様々な業務を行ってきた上海事務所ですが、昨年からは「対日投資促進」と「フィルムコミッションの推進」に新たに取り組み始めました。

茨城県と中国政府間での輸出入に対する双方の思惑の一致（茨城：輸出したい、中国：輸入したい）や、中国人の日本製品に対する絶対的信頼感などから、茨城県内の企業が作る優良製品の輸出促進には特に力を入れているそうです。展覧会等の様々な機会を通じ、県内製品のPR活動を多く行っているとのことでした。

また、スタディーツアー中、野上所長は日立市かみね公園へのジャイアントパンダの誘致業務でお忙しくされているようでした。



感想

以前から中国については、親近感を抱きながらも、メディアや身の回りの人々が作り出す中国へのマイナスイメージを鵜呑みにしていたところがありました。このスタディーツアーは5日間という決して長くはない期間でしたが、安全で充実したプログラムで、身をもって中国の社会・文化を体験するには絶好の機会でした。このツアーを通じて、これま

で持っていた先入観が取り払われ、中国に対する好感や客観的な視点を持つことが出来る

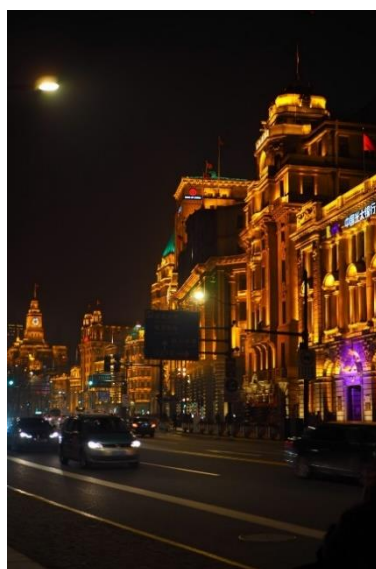


ようになりました。また、企業の方々、同伴して下さった職員の方々、他大学からの学生たち、現地の大学生をはじめ、多くの出会いがある中で、様々な価値観に触れ、日々学びを得ながら将来のキャリアについて視野を広げることが出来ました。この経験を忘れずに、今後は中国語の学習もしつつ、身近なところから日中友好の輪を広げていければと思います。

根本 崇生

報告（外灘）

私たちツアー一行が上海に到着した日の夜に、まさに上海の顔ともいえる外灘及び浦東の夜景の視察に行った。外灘側の遊歩道からあたりを見回すと、黄浦江を挟んで向かい側には東方明珠塔をはじめとする超高層ビル群がそびえ立ち近未来的な雰囲気を醸し出している。一方で遊歩道側の街並みを見てみると、浦東側とはうってかわって西洋式の重厚感のある石造りの建築物が立ち並んでいる。「アジアなのにヨーロッパのような街並みだ」と最初にこの外灘という地区を見たときに感じたが、そのような景観になった背景にはある上海の歴史の上に生じた「租界」によるものであるということが分かった。



写真－１ 夜の外灘

さかのぼること中国南宋の時代、上海は蘇州、杭州、南京のよう南方有数の都市たちには及ばなかった。そんなあまり目立たない都市だった上海に転機が訪れる。アヘン戦争である。19世紀、中国の茶が普及して輸入超過を防ぐためにイギリスが取り決めた三角貿易によって中国国内に大量のアヘンが持ち込まれる。危機感を覚えた当時の清朝はアヘンを回収、焼却。これを機にイギリスは武力を行使して中国に自由貿易を迫り南京条約を締結

させる。その結果、上海を含む5港が開港されることとなった。これをきっかけに、上海やってきたイギリス人は自国の領事館、自分たちの家族の住居のための土地が必要だと考え、中国の主権が及ばない世界初の「租界」を設置した。それを見ていた西欧諸国は「自分たちも」と次々と条約を結び、租界を設置していった。彼らは自国の文化をそのまま持ってきて移住してきた。もちろん建物も例外ではなく当時流行っていた様式を取り入れている。だから今でも外灘には「その名残」が残っているのである。各国の租界、領事館が設置され貿易の要所となり上海は目覚ましい発展を遂げて現在のような大都市へと成長していった。

参考文献)

- 1)「上海」 榎本泰子 著 中公新書
- 2)「上海 歴史探訪」 宮田道昭 著 東方書店

感想

今回このスタディーツアーを通して自分の抱いていた中国のイメージと実際の状況の齟齬がなくなったように感じた。例えば、二日目のホテルでの朝食で中国人男性に話しかけられたことがあった。私は中国人が日本人をあまりよく思っていないというイメージがあったので、正直彼との会話に抵抗があった。しかし、片言の英語とスマートフォンを使ってコミュニケーションをしていくと私が持っていたイメージとは裏腹に日本人には礼儀正しく、好印象を抱いていると言っていた。誰しも先入観や勝手なイメージを無意識のうちに持ってしまうものである。それが正しいか確かめるためにも、自分の足で現地に赴く大切さに気付けたのもこのツアーの大きな収穫だったと思う。

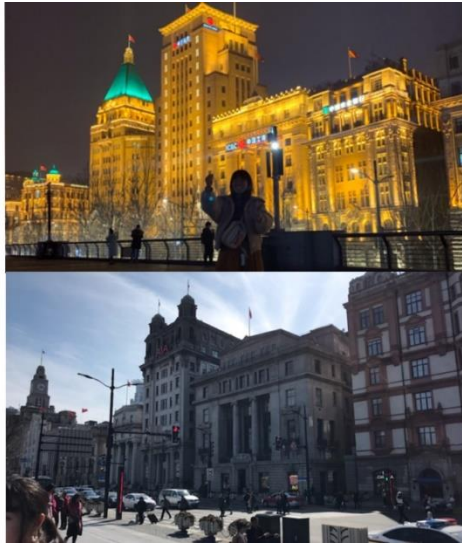


写真—2 豫園で食べた小籠包

比氣 梓

報告（外灘）

3月4日、約3時間のフライトを終え、夕食後に向かったのが外灘(ワイタン)だ。ここは上海の有名な観光地で、夜景がとくに綺麗である。外灘のある浦西は旧市街地と呼ばれ、イギリス租界時代の行政と経済の中心地だった影響で洋風建築物が建ち並んでおり、上海浦東発展銀行や中国工商银行をはじめ、錦江都城經典酒店、外灘美術館、上海海関などが軒を連ねている。黄浦江を挟んで向こう側の浦東は新市街地と呼ばれる「浦東新区陸



家嘴金融貿易中心区」が広がっている。上海タワーや森ビル、東方明珠電視塔や金茂大廈など、近代的な建物が煌びやかに光り輝く。その浦東の様子とは対照的で、照明でライトアップされる建物の美しさが見る者の心を惹きつけた。

私達の周りには、外灘のライトアップをバックに結婚記念写真を撮っているカップルが数多くいた。縁起がいいとされる赤色のドレスを身にまとい、専属のカメラマンとアシスタントと協力をして撮影していた。広場の一角に、アイスクリーム屋のような建物の写真撮影受付所が

あるくらい需要が高い。2時間見ても飽きない外灘の夜景で2人を写し出せば将来安泰間違いなしだ。

7日の学生と一緒に回る自由散策では、昼の外灘を堪能した。建物の近くを歩いたことで、より重厚感を感じ取ることが出来た。遊歩道がとても広かったり、壁に花が植えられていたりという新たな発見の中、1番驚いたのは、横断歩道の信号機に防犯カメラが付いていて、渡っている人の顔をモニターに映し出すシステムがあることだ。約3秒ごとに違う人の顔が映し出されており、まさに最新テクノロジーであった。

歴史が作り上げた西欧風の建物と発展を遂げた上海の建物を眺める事の出来る外灘はとても魅力的な場所である。

感想

今回のツアーで様々な企業を訪れたことで、色んな人と出会い、その企業の仕事はもちろん、聞き手の興味が湧く話し方、個々の人生観なども学ぶことができた。数多くの社会人の方とお話するのは私にとって初めての経験だった。他にも上海の街中で他の国との違いを見つけたり、日本料理と中華料理の違いを実感したり、吸収することの多い5日間だった。

以前より中国に興味を持った今、中国語の勉強をしたり、ツアーで得た知識を活用したり、知識を元にまた別の考えを巡らせたりして視野を広げようと思う。また、上海ではない中国の土地に行ってみて、実際の中国はどんな国なのか、文化や慣習について理解を深めていこうと思う。



報告(現地大学生との市内視察と食事会)

上海スタディーツアー4日目の午後は、華東師範大学に通う日本からの留学生と、日本語を勉強している中国人の生徒さんと一緒に、上海の南京東路付近の市内を散策しました。中国と日本の文化や流行、政治に食べ物、様々な話をしながら市内を散策しました。



A～Dの4つのグループに分かれて見学しましたが、私たちのグループは南京東路にある上海外文書店という7階建ての大きな書店に立ち寄ったり、昔は租界地でもあった外灘の景色を見に行ったりしました。ただスタディーツアーに参加しているメンバーだけで視察するのではなく、華東師範大学の生徒さんに案内してもらうことで、歴史を教えてもらいながら視察することができ、さらに自分たち

では気づかない中国ならではののお店などに立ち寄ることもできました。その後、市内のレストランで火鍋料理を食べながらその生徒さんとの交流会を行いました。日本のアニメやアーティストの話で盛り上がり、教育制度の話をしたり、新しい知識を得て、中国の食文化に触れて、有意義な時間になりました。

散策で書店に立ち寄った際は、まず本が横書きであること、日本軍や日本との戦争の本も取り扱っていること、中国の教科書に載っている“背影”の話、日本文学を学ぶ中国人はみんな“菊与刀”を読むこと、中国の流行の図書など様々なことを教えて頂きました。そして、散策では中国の建物は日本と違って地下がないことに気付きました。食事を兼ねた交流会では、中国の学生は勉強熱心で、小学生の頃から深夜まで遊ばず宿題をすること、日本を愛する中国の方はアニメ好きが多いこと、中国の小学校はクラブがないことなど実状を学ぶこともできました。

感想

スタディーツアーに参加した生徒全員がいきいきと活動していたように思います。旅行に行って上海市内を見るのではなく、スタディーツアーだからこそできた活動であり、現地の生徒さんの声を聴くことでリアルな話や教科書や新聞で学ぶことの出来ないことを学ぶことが出来ました。中国と日本という違う国でも、考え方が似ているところもあり、話が盛り上がりました。現地の生徒さんの中には日本の政治について興味があり詳しい方がいて、聞かれ



た質問に答えることが出来なかったことが悔しかったので、もっと自国のことについても勉強しないといけないと強く感じました。また、中国語を勉強していても現地に行って、話して初めてわかることがたくさんあったので、まだまだ知らない世界はたくさんあると改めて実感しました。今後自分の環境や知識に満足せずに、常に広い視野を持ってたくさんの人と関わっていきたいと思います。

松本 史琉

報告（JETRO）

3月5日、上海市内のビルにて我々は日本貿易振興機構（JETRO）上海事務所の方々から「中国の最新経済動向」と「中国における対日直接投資誘致」の講義を受けさせていただいた。前者の講義では中国における共産党政府における規律検査の徹底、行政の合理化、法治の徹底が進行。消費者のライフスタイルの高度化、産業界での製造業の高度化による最近の中国の社会的現状を学んだ。とくに電子マネー等のモバイル決済によるキャッシュレス化や電気自転車の爆発的普及、デリバリーサービスに基づくインターネットショッピングの活発化が顕著にみられることが分かった。後者の講義では中国―日本間の投資についての理解を深めた。2000年から対日直接投資残高は右肩上がりを描き、2017年には28.6兆円となり4年連続過去最高を更新した。JETROの進出成功事例として現在茨城県つくば市に法人を設立したICT関連の株式会社3DNestに対しての支援としてテンポラリーオフィスの貸与やサービスプロバイダーの紹介を行った。重点誘致対象として



て製造拠点を日本に作り、レベルアップを目指すことや中国発のプラットフォームビジネスの国際化がトレンドとして現在相談傾向が増えている。また日本の市場でも Huawei のスマートフォンなどを筆頭に中国ブランドの浸透が見て取れ、日本で製造し中国で売るという新たな日中協業が懸案される。今後の課題としては国際ビジネス経験者の不足があげられる。中国企業はスピード重視の反面、日本企業は慎重という商習慣の相違がみられ、それに伴って相互不信の発生を懸念する必要があることを学んだ。

感想

今回の上海スタディツアーが自分においては初めての海外旅行であり非常に新鮮な経験ができたと思った。外灘の近代的発展と豫園の歴史的背景が同じ上海市内でみられることは非常に刺激的であった。諸日系企業の見学や企業の方々の夕食会を通じてこれからインター



ンシップなどを来年度迎えるにあたって非常に有意義であったと思う。また勉強面だけでなく、ツアー4日目の華東師範大学の生徒との交流では最初はいまよく話せるか、仲良くできるか不安だったがそれが杞憂に思えるほどとても楽しむことができた。この4泊5日の上海スタディツアーで得た経験を大学生活や就職活動にこれから生かしていきたいと思った次第である。

谷田部 成美

報告（企業との夕食会）

スタディツアー2日目の3月5日の夜、私は「老八様」という市内の広東料理のレストランで日系企業関係者との夕食交流会に参加した。3つのテーブルに1人又は2人の日系企業関係者の方と学生が座った。常陽銀行上海駐在員事務所、SYSビザサポート、レヨン工業、在上海日本国総領事館といったさまざまな職業の方々が来てくださった。私の座ったテーブルではレー



ヨン工業所属の方と在上海日本国総領事館所属の方からどういった仕事をしているのか、中国に来ることになったきっかけ、またプライベートなことなど色々なお話を聞くことができた。レーヨン工業さんはスマホの中にある基盤などの物に付いた小さなゴミやホコリを取り除く機械の製造を行なっている。領事館の職員の方は詳しく言うことはできないが簡単に言うと中国に来て困った日本人を手助け・橋渡しするような仕事をしているようだ。領事館職員の方は夕食会に少し遅れていらっしやったが、ちょうどそのような仕事が入り対応していたようだ。お二方とも中国にはとても興味があったというようなことはなかったが、知り合いの縁や仕事で中国に来て、仕事や生活を満喫されているなど感じた。

私が1番興味を持った話は中国での生活や文化についてだ。中国の乾杯の仕方や、とてもアルコール度数の高い白酒という中国のお酒のこと、料理の出る順番、バスなどのICカード事情、偽札の見分け方、中国で何か行動を起こす時の日本との違いなど。茨城県上海事務所の職員の方も混ざり、中国で暮らしたからこそわかった話がとても盛り上がり、また聞く側もとても楽しかった。

企業の方と食事会なんて何を話せばいいんだと少し不安だったが、今回の夕食会の交流は企業のことだけでなく、中国での暮らしや学生時代にしたことなど、様々なお話を聞くことができた。

感想

私は中国と日本の文化の違いについて知りたいなと思ったのと、語学の向上を目的にこのスタディツアーに参加した。文化については、前に述べたようなことや、食事の脂っさ、日本と違い店員さんが笑顔で対応といったことがないこと、トイレトペーパーは付いてない場所があることなど、日本での当たり前がないことに戸惑いもあったが同時にこれが文化の違いなのかなと思った。語学に関しては大学で2年間勉強をしていたがあまり分からず、華東師範大学との交流で少し話してみたが発音が少し違うと言われてしまった。やはり中国語は難しいなと思ったし、これからも勉強をしていこう思った。



中国では雨が降ったり大気汚染の影響で霞がかかっているような空しか見ることができず、ガイドさんも青空が見たい時は日本に行くんですよと言っていた。しかしスタディツアー3日目で晴天が見ることができ、とても感動した。

このスタディツアーに参加して、文化の違いを知り、企業さんや違う大学の人との交流など、貴重な経験ができた。

横田 紗彩

報告(春秋航空)

3月5日(火)に虹橋国際空港にある春秋航空公司(春秋航空)本社を訪問しました。春秋航空は、2005年春秋国際旅行社をベースに中国初の大衆化市場向けのLCC航空会社として設立。近年は日本市場へ参入し更なる発展を目指し急成長を遂げています。中国民営

初の国際線、上海―茨城を2010年7月28日に初就航し茨城に住んでいる私たちにも身近な存在になっています。

まず始めに会社の歩みや現状について詳しく説明をして頂きました。その中で1番印象に残った話は、コストを削減していることです。例えば、他の航空業界は高収入・高コストを重視するのに対し春秋航空は稼働率・コストの面に重点を置いています。その結果、搭乗率を比べると他の航空業界は約7割程度だが春秋航空は約9割を超えます。それだけではなく搭乗率は年々増加し春秋航空の強みになっており、国際主要な航空会社の単機利潤は世界トップを誇ります。私はこの実績からコストを削減することは私たちの航空券が格安になり他の航空会社よりも安いので利用しやすいのが魅力的であると考えます。



それから、オペレーション室などを見学しました。見学する前は人がたくさんいて広いイメージを持っていたが、いざ中に入ると教室1つ分ぐらいの広さしかなく、各部署基本1人で約20人ほどの人が働いていました。想像していたイメージと違っていたので誰でもとても驚くと思います。また、独自にプログラムを作る部署、パイロットが24時間使えるシュミレーションセンターなどコストを削減しているとは思えない設備が整っていました。会社の説明や施設見学を通して春秋航空はコスト削減を行いつつさらに発展していくと考えられます。

感想

上海スタディーツアーに参加して、たくさん学べたことがありました。まず、このツアーに参加したきっかけはあまり自ら外国に行く機会がないので是非行って見ようと思い参



加しました。最初は中国語を勉強してるわけでもないしとても不安でした。しかし、総領事館やジェトロ、企業訪問などいろんな方の話を聞いたり見学をした中でタメになることや知らなかったことが多くとても勉強になりました。1番印象に残っているのは春秋航空を訪問したことです。シュミレーター室や実際にパイロットやキャビンアテンダントがミーティングを行っているところを間近で見ることができかなり貴重な体験でした。さらに、現地の大学生と交流できたのもいい思い出です。今までは中国に対してあまり興味が無かったですが、これからは中国語に挑戦してみようと思います。

※ここに書かれている内容は、参加した皆さんそれぞれの受け止め方に基づく個人的な見解です。また、記載内容について正確さを保証するものではありません。

※全部または一部を問わず、無断転載を禁じます。